

第 17 回図書館総合展

『新発見！朗読ワークショップで「患者？」サポート』

開催報告

2015 年 11 月 30 日

NPO 法人キャンサーリボンス



図書館総合展 概要

第17回図書館総合展へのフォーラム出展につきましてご報告いたします。

- 展示会名称： 第17回図書館総合展 (The 17th Library Fair & Forum)
開催時期： 2015年11月10日(火)～12日(木)
会場： パシフィコ横浜 (横浜市西区みなとみらい1-1-1)
展示会内容： 図書館(公共・大学・機関・企業・学校等)についてのサービス・トレンド
学術情報を紹介する図書館界最大の展示会。
参加者数： 34,359名
(11月10日(火) 10,962名、11日(水) 12,031名、12日(木) 11,366名)



図書館総合展 展示会場の様子

パネルディスカッション報告

本パネルディスカッションでは、「朗読で元気をつなぐプロジェクト」朗読ワークショップの成果をベースに、言葉と本が持つ力や、朗読の地域への展開、図書館での朗読ワークショップの可能性についてディスカッションしました。

テーマ	新発見！朗読ワークショップで「患者？」サポート
開催日時	11月10日（火）15:30～17:00
会場	パシフィコ横浜 DホールE-205（第7会場）
参加者数	51名
主催	朗読で元気をつなぐプロジェクト（NPO法人キャンサーリボンズ、一般社団法人軽井沢朗読館）、図書館海援隊朗読部、アストラゼネカ株式会社

配布資料：式次第、アストラゼネカ株式会社様ご資料「らしくむきあう vol.10」、朗読CD「あなたには、明日、生きる意味がある」（NPO法人キャンサーリボンズ）チラシ

【パネリスト】

中村清吾さん（NPO法人キャンサーリボンズ理事長、昭和大学医学部乳腺外科教授）

青木裕子さん（一般社団法人軽井沢朗読館館長、軽井沢町立図書館館長）

神代浩さん（文部科学省科学技術・学術総括官兼政策課長、図書館海援隊隊長）

【コーディネーター】

岡山慶子（NPO法人キャンサーリボンズ副理事長）

■ごあいさつ 神代浩さん 文部科学省科学技術・学術総括官兼政策課長、図書館海援隊隊長

元文部科学省社会教育課長時代、公立図書館・市立図書館を担当し、図書館海援隊*の発起人でもある神代浩さんから、図書館海援隊と図書館が連携してがん情報を発信する「図書館海援隊リボン部」、図書館と朗読の活動連携をする「図書館海援隊朗読部」についてご紹介いただきました。

※図書館海援隊とは…

平成22年1月、有志の図書館が「図書館海援隊」を結成し、ハローワーク等関係部局と連携した貧困・困窮者支援をはじめ具体的な地域の課題解決に資する取組を開始。その後、この取組に対し、他の図書館からも参加希望が寄せられ、それに伴い医療・健康、福祉、法務等に関する役立つ支援・情報の提供やJリーグと連携した取組みなど分野が拡大。参加館数は現在50館。



神代さんのごあいさつの様子

■朗読ワークショップの活動報告 岡山慶子 NPO 法人キャンサーリボンズ副理事長

続いて、キャンサーリボンズ副理事長 岡山慶子さんから、朗読ワークショップ（WS）の活動報告がありました。

「ことばと声の力が人を元気にする」という考えのもと、患者さん支援の一環として制作した朗読CDの反響が大きかったこと、患者さんと医療をつなぐ場でも朗読が高評価であったことなどから2013年「朗読で元気をつなぐプロジェクト」の発足につながり、乳がんや糖尿病、ぜんそくの患者さんを対象にした朗読WSを続けていることを紹介しました。

進行方法等の説明やワークショップのポイント、WSの有用性についての効果検証の研究でも心理尺度の得点が統計的に有意に改善、朗読が患者さんを元気にすることが裏付けられていることなどが発表されました。



朗読WSの説明をする岡山さん

■朗読披露 一般社団法人軽井沢朗読館 館長 青木裕子さん

軽井沢朗読館館長 青木裕子さん絵本が、「なきすぎてはいけない」（作：内田麟太郎）の朗読を披露しました。



朗読をする青木さん

■パネルディスカッション

<患者サポートとしての朗読>

・朗読ワークショップのきっかけになった2つの体験（青木裕子さん）

NHK アナウンサー時代の後輩、池田裕子（フリー転身後は絵門ゆう子）さんが、青木さんの朗読会をきっかけに朗読を始め青木さんがそのサポートした体験、軽井沢朗読館を訪ねてきた患者さんから朗読指導を頼まれたエピソードを紹介しました。

「池田さんは、その後何度も朗読会を開催し、2～3年の闘病を経て亡くなったが、その間の彼女のメッセージ、光り方、活躍のしかたが素晴らしかった。朗読の舞台に立っているときは、いつも生き生きとして誰よりもすばらしい朗読をして、「こんなに人は輝くんだ」ということを身近に知った。

また、軽井沢朗読館に、がんの末期の方が訪ねて来て、自分の子供にあと何回本を読んでやれるか分からない。もっといい朗読を娘に聴かせたい、娘の記憶に残したいので朗読を教えて欲しい、と切願され指導した。朗読館を出るときには「ああ、きれいな空」と空を眺める余裕もできて感じ入っていた。朗読にはそのような力があるんじゃないか。そのような体験をキャンサーリボンズの岡山さんに相談し、がん患者さんのための朗読WSに繋がった。」

・医療者としてのワークショップ体験（中村清吾さん）

NPO 法人キャンサーリボンズ理事長で、昭和大学医学部乳腺外科教授の中村清吾さんは、医療者として朗読会に参加した感想を紹介しました。

中村清吾さん



「がんの患者さんは告知を受けると、谷底に突き落とされたようなショックで家に引きこもったり、一時期仕事から離れたり、表に出る一步を踏み出すのに勇気がいることがある。でも、本当は外に出て自分なりの生活に戻る、身体をむしろ動かした方がいいし声を出した方がいいが、きっかけがなかなかつかめない方が沢山いる。朗読がそのきっかけになると感じている。

朗読は本の登場人物についての思いを話し合う。その過程の中で、自分の話、相手の話を聞くことが自然に行われて、その中で共感したり、今まで気がつかなかった生き抜く知恵や勇気を、本を通して学ぶ。もっと簡単に言うと、たとえば銭湯に行って互いに互いの背中を流しあうような。最初の一步を互いの背中を流しあうような形で踏み出せる、朗読の力の一つはそういうことなのかなと、患者さんを通じて感じている。」

・朗読ワークショップ（WS）体験者の感想

「乳がん患者さんのための朗読会」参加者（伊東小百合さん）が、朗読会の感想を話しました。

「最初はぎこちなく始める朗読も輪読で2、3週するうちに慣れ、自分の声が出るようになり、すごく心地良くなってくる、お腹の中から力が湧きあがってくる感じ。また、自分の心境が声の変化に表れるように感じる。

WSの前後で皆の顔色が全然違い、どんどん自信を付けている雰囲気も分かるし、場に流れている空気がとても良くなってくる。

読後の感想や気持ちを共有する時間では、本のことも語りたい、自分の病気のこと語りたい、人の話も聞きたいし、いくら時間があっても足りずすごく充実していて、何とも言えず良い空気が流れる。話が尽きず帰りも外に出て立ち話をしたり、そのままお茶に流れたり、連絡を取り合ったりする程。

この会は、がん患者のためのWSですが、本は皆に親しまれている。どなたを対象にした朗読会でも、参加をしてみたらいろいろ感じるどころがあるのではないかと。



パネルディスカッションの様子

・図書館での、医療との関わりとしての朗読会について（神代さん）

「医療情報を扱っている図書館も多いし、朗読会や朗読WSを開催している図書館もあると思うが、その二つを結びつけることは今まで気が付かなかった。二つを結びつけてWSをやったことがすごい効果生み出している」

<朗読の力、言葉のもつ力、本の役割について>

・朗読の力と朗読の3つのポイント。

同じ病の人同士が作る安心感と、内なるものを引き上げる文学の美しさや本の力（青木さん）

「朗読は、その人の生き方や人柄、心映え等全てが滲み出てくる。聴いているとその人の世界を味わわせてもらうような、不思議な力があると思うようになっている。

朗読の三つポイントとして、地声で飾らない自分の普段の声で読む、周りの人に私の声を届ける・聴いてもらう姿勢で読む、本の世界がどういうものであるか情景をしっかりと頭に描いて声に出す」と、アドバイスがありました。

また、「同じ病気の人が集まる朗読会とは、最初はどのようなものだろうと思っていました。

ぜんそくの患者さんを対象にした会がすごく印象的で、ぜんそくの患者さんは呼吸が苦しくなって声が出なくなる恐怖感があるため人前で本を読むことはまずないけれど、ここだったら読んでいるうちに息が苦しくなってやめても許されるだろうと言った人が何人もいた。同じステージを経験した方にしかわからない悩みがあるんだろうと思う。

そういう人たちと共有する安心感の中で、自分の体験の辛いことや病気に向く話ばかりでなく、文学の持つ美しさや本の持つ美しさ、本の高みというか、ある種、昇華されるようなものを通してお互いの話に持っていく、そのこと自体が、本や作家の持つ視点の力を借りてるのかな、と私もまだ考えながら、皆さんの内なるものを引き上げる力を何が持っているんだろうと、不思議な気がしている」と、語りました。



パネルディスカッションの青木さんの様子

・本がもたらす病気にとらわれない共感、自身への気づき、他者との共有（岡山さん）

「朗読ワークショップでは、同じ本を選択した人でグループが構成されるので、仲間に受容される、同じ本を選んだという安心感のようなものが、まず最初にある。

朗読するテキストに全員ほぼ同じ量を読んでもらうように印をつけているので、同じ分量を朗読するルールがもたらす、自分も聴いてもらっているという喜びがある。

病気の話を一いきなりせず、本の話から始めるので、病気にとらわれない共感のようなものがその場を占め、読んでいるうちに自分と同じように考えたり励ましてくれたりする言葉に出会い、そこに新しい自分自身の気づきや他者への気づきがあるのではないかと。

そして、朗読で声を出すので身体も使っている、心と体の一体感も関係する。病を通してだけでなく、自分一人ではないというようなことを皆さんお持ちになるのかな、と思う。

それでも会の最後には、自分はこれからちゃんと一人で生きていくよ、というようなメッセージを書かれる方が多いが、皆さんそれぞれ限りある命だということがわかっている中で、本を通してみんなで何かを得ていくという感じが、非常にする。どうしてこういうことが起きるのか」と、朗読体験者に問いかけました。

・朗読による心と体の一体感。お腹の底から声を出すことの温かい空気（伊東さん）

「子供が小さい時読み聞かせを毎晩して子供も楽しみにしていたが、それ以上に自分が楽しかった。読み聞かせの必要がない年齢になってからまた再開した時期があったが、朗読WSでその感覚をすごく思い出した。

また、合唱を長くやっているが、合唱もお腹の底から声を出して伝えるところが似ている。身体全体を使って伝えたり、自分の中から湧き出てくるものを、わっと出す感じが共通点になるような気がしている。WSでは本を読むだけでなく話も結構するし、とにかくお腹の底から声を出すということ自体が温かい空気を持っている、という感じがする。」

・朗読について、今後図書館に期待すること（神代さん）

「図書館が利用者のニーズに応じていろいろ資料や情報を提供するの図書館員の想定内のサービス。そこに、こういう形のワークショップの手法もある、選書という図書館員の司書としての専門性をいかんなく発揮できるだけでなく、逆に司書としてのスキルをそこで試されたり、鍛えられたりするような部分があるじゃないかと思う。

そういった切り口からぜひ図書館として取り組むべき新たなサービスとして、非常に効果のある、あるいは可能性のある朗読にぜひ取り組んで頂きたい。

そうすると図書館に対するイメージはどんどん変わっていく、単に本の貸し借りをしているだけのところだけでなく、本当に困った人たち向けに役に立つサービスをしてくれるような、公共施設というような意識がだんだん広がっていく。

図書館にとっての社会的な評価の向上につながるような取り組みではないかと思うので、こういう取り組みがどんどん広がっていくことを期待している」と、会場に向けてエールを送りました。

・朗読ファシリテーターについて

図書館職員向けの朗読ファシリテーター養成講座の紹介（岡山さん）に続いて、青木さんよりファシリテーターの役割について説明がありました。

パネルディスカッションの様子

（青木さん）

「ファシリテーターの役割は、ほんのちょっとでいい。あんまり押し付けない方がいい。自分の意見や自分の感想を押し付けなくて、サラッサラッと運んでいく、その要領さえ覚えていただければ、名ファシリテーターになる。

話したいことが沢山ある人達が集まって一つの本を囲んで話をするので、本当に時間がなくなる、その時間のストップウォッチを「はいここまで、すみません」と押すような、そういう役割。その辺のコツみたいなものを一緒に勉強していただく。

最初に自然の声で朗読をして、この3つのポイントでやりましょう。後は何を感じましたか、みなさんで話し合ってくださいね。そういうきっかけを作っていくような役割。そういう養成講座はあまりない。



なぜ皆さんがこんなに気持ちが解放されるような結果を生じているかという、同じ本を選択する安心感があるんじゃないか。自分がどんな本を読んでいるか知られるのは恥ずかしい感じがどこかにあるが、同じ本を選んだ仲間意識がここで出てくる。本の持つ力、言葉の持つ力はそういうところにある。こういう本や言葉を介して、皆さん同じものを共有していくことはすごいことだと思う。」

また、黙読と音読の感覚の違い、声に発して気がつく言葉の存在など、‘朗読の力’について岡山さんが語ったことを受け、青木さんが「自分が発音しているこの言葉を真剣に聴いてくれているステージ感、そのドキドキ感もまた別世界に入らせてくれる要因のひとつ。」と、朗読の魅力について語りました。

・朗読に期待する「つなぐ」役割（岡山さん）

「この活動は、「朗読で元気をつなぐ」プロジェクトと、「つなぐ」という言葉をあえて入れているが、自分の命をつなぐという、つないでいて欲しい、という想いが第一。

自分の命をつないでいくことも大事だし、次の人につないでいくことも大事だし、いろんな人がつながって朗読がその役割をしてくれたらいいな、と思う。

図書館と地域の患者さんがつながっていけば、もっと新しい世界がつながっていくと思います。」

・本による生き方の体験（中村さん）

「今はいくつも選択肢がある中でその人に相応しい治療を選ぶとか、どのくらいの期間生きられたかよりも、どうよく生きたかも尺度になっている。

人の一生は本を読むことによって疑似体験をして、疑似体験の中から自分なりの相応しい生き方を見つけ出すこともできるかな、と思う。

自分はがん教育を教えているが、学生時代は教科書から学ぶことしかないので、卒業したての先生たちは死を目の前にした人にかける言葉がない。でもそれは本を読むことによって、いろんな人の生き方をみて言葉を見つけられる、共感できる。十人十色、百人百様、千差万別だと思って、今もって体験している。」

パネルディスカッションの様子



・図書館における朗読ワークショップ役割（神代さん）

「どういう境遇にある患者さんにどういう本を提供すれば、どういう効果があるのか、ということをもっと一緒に体験することができれば、お医者さんや看護師さんにとっても普段の患者さんへの接し方のスキルアップにもつながる可能性を感じるし、医療の質も向上し、患者さんの生活に対する課題の改善にもつながっていく。図書館がその核になる役割を果たして行くといいのではないかと、セッションをまとめました。」